▣血の都（二卷）

帝キネ時代映畫

紹介　第百八十七號「湖畔の晩鐘」

宮澤進郎氏の第一回作品である。譚はお[illegible]よりの幕末亂鬪劇で見る者を中毒[illegible]

何等感銘も得られない。白瀧源三郎と瀧井金八との戀の葛藤も曖昧で頓りない事夥しい。總體に出る人物も人物も皆な柔弱な人物計りで幕末時代の殺氣漲る意氣などないのは弦合がない。富澤進郎氏の監督も無難であるだけで、强いて好い所を求めれば移動の爭鬪に寸變つた撮影をした位なものである。瀧川路三郎氏の金八はその人らしいか役そのものが變な役なので當人の活躍も引立たない。結末の狂ひなどマキノで成功した「血に狂ふ者」の演出を蒸し返して居るが榮ゑない。尾上榎十郎氏の源三郎は勤王黨の旗頭とは受取れない柔弱さで感じ出ですであ[illegible]。結末の落入りも力强くない「血の都」又一湖畔の晩鐘」と云ふ題名もふさはしくない。

―山本　綠葉―

興行價値――素晴らしい亂鬪もなく平凡な幕末劇であるが、かうした亂鬪ものが意味なく受けら觀客の筈であつたら、どうやら滿足するかも知れない。（三月十九日　大山芦澤劇場）